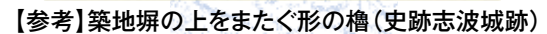




いっぽう外柵線は、河川が蛇行する部分で材木堀が開口し、またこの河川が柵に流れ入る部分と流れ出る部分も、同じく開口していたと考えられます。つまり防御をかためるという点では、外柵線は実用的でなかったと考えられます。



■ 柵の囲いと出入り口

政庁・外郭・外柵と三重に囲まれている払田柵跡

ばれる石垣になっていました。また外郭線には櫓^{やぐら}もつくられ、柵の防御をかためていました。



■ 外柵線と周辺の施設

柵の外周を囲む外柵線には、東西南北に八脚門が構えられ、側面中央の柱（棟柱）で、門と材木塀が接続されていました。

弘田柵跡は、外柵内に河川を取り込んでいるため、材木塀の開口した部分が見つっています。また櫓が確認されていないことも合わせ、外柵線は、巨大な城柵の防御をかためるというよりは、柵を周囲から区画



南大路にかけられた橋の跡と橋脚（南から）



河川の蛇行にともなう外柵材木塀の開口部（東から）

する壮大な施設として、蝦夷の人たちに誇示するためにつくられたとも考えられています。

外柵南門と外郭南門の間からは、河川に架けられた橋の跡が見つかったことから、2つの門をつなぐ南大路が通っていたと考えられます。しかし外柵は9世紀中頃に放棄され、その後、たび重なる洪水により河川は移動し、もとの流路も埋没してしまいました。



■ 外郭線と周辺の施設

外郭線の東西南北にも、外柵線と同じく八脚門が構えられていました。特に正面入り口ともいえる南門は、両側が石塁と呼ばれる石垣でかためられて築地塀へと接続し、高さ3.6mと考えられる石塁の上には、防御のための櫓もつくられました。さらに南門の前には、5段の石階段が積まれ、柵の威容を蝦夷の人々に誇っていたと考えられます。櫓は門の両側のほか、外郭線上に一定の間隔で設置され、外郭線は柵の防衛線としての役割を担っていました。



外郭南門と石階段の跡（南から）



復元された外郭南門と石塁、石階段（南西から）

外郭線に構えられた4つの門は、外郭線の塀から「八」の字に内側に入り込むかたちで接続されていました。材木塀が連なる北門のほか、築地塀が巡る東・西門でも、門との接続部分は材木塀となっていました。

北門は低湿地につくられたため、門柱が柱穴の底から135cmも沈んだ状態で確認されました。このことから北門は、軟弱地盤のために柱が沈み、ゆがんでいたと考えられます。



外郭北門と櫓・材木塀の跡（北西から）



復元された外郭北門から政庁をのぞむ（北西から）



外郭北門東側の櫓・材木塀の跡と木道（西から）

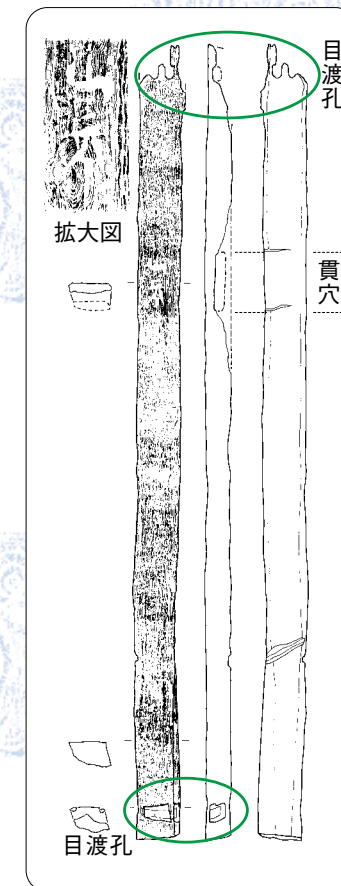
政庁北側の丘陵裾部から北門までの間は盛土造成され、北大路がつくられていたことがわかっています。しかし門柱も沈んでしまうような低湿地では歩行もままならず、10世紀初めには、大路の西寄りに古い柵木を再利用して置き並べ、木道がつけられました。木道は北門から東西へ連なる材木塀の内側にも沿ってつくられ、この中から長さ4.65mの上下端が残る唯一の柵木が見つかり、「山本」と文字が刻まれていました。



西門跡

東門と西門は丘陵斜面の中腹につくられ、特に西門には真山がせまるため、外柵西門への通行はもちろん、見通すことさえできません。これらのことから、外郭線の北・西門については、城柵に必要な不可欠な施設としてつくられ、建て替えられながら最後まで維持されるものの、実的な施設ではなく、出入り口の限られる、城柵という巨大な施設を蝦夷の人々に誇示することが、目的の一つであったとも考えられます。

外郭西門跡から西方向をのぞむ
外柵西門は真山の背後となり、見通すことさえできません



全長4.65mが残る柵木と「山本」の刻書